



坂崎千春 SAKAZAKI CHIHARU

絵本作家、イラストレーター。東京藝術大学美術学部デザイン科卒。ステーションリーメーカー制作室のデザイナーを経て、1998年よりフリーでの活動を開始。JR東日本のSuicaカードに用いられているペンギンのキャラクターや、ダイハツ・ムーヴ コンテのCMでおなじみの「カクカク・シカカ」など、数多くの絵本やキャラクターを生み出している。最新作はコミックエッセイ『うわのそら』。

描き心地に満足できる 「道具」としての存在

坂崎千春氏は、JR東日本のSuicaカードのペンギンをはじめ、数々の代表作を生み出すトップクラスのイラストレーターだ。今回は「Intuos4」を使っている制作について、お話をうかがった。

制作・川俣綾加(ラレア) 取材・文・遠藤義浩 写真・岸マモル



指先の微妙なニュアンスを感じする2048レベルの筆圧機能と画材同様の軽い筆圧でも描画できる最小1gON荷重で描きやすさを実現。



ショートカットを設定できるタッチホイールとファンクションキー。「描き心地だけでも十分満足ですが、タッチホイールを使えばブラシサイズの変更も簡単ですね。もって試してみます(笑)」



実際にIntuos4で描きながら、操作性について説明する坂崎氏。「描き味がよくなったので、線の太さやイラストの細部の修正にとっても適しています」

微妙なタッチが再現できて、思い通りのラインを描ける

イラストレーターをはじめ、トップクリエイターから絶大な支持を受けているツールが、ワコムから発売されている「Intuos4インテュオス4」だ。これまでも数多くのイラストや絵本を世に出してきた坂崎千春氏も、Intuos4のユーザーの一人である。もともとIntuos3からのユーザーであった坂崎氏が、仕事の制作環境を一新するに伴い、Intuos4を使い始めるようになって半年が経過するという。

「私の場合、鉛筆で描いたイラストをスキヤニングし、データとして作品を仕上げていきます。マウスよりも修正作業をしやすいという理由からペンタブレットを使うようになりましたが、正直、簡単な修正作業以外には使っていませんでした。ですから、Intuos4に変えて最も驚いたのが、描きやすさ、描き味です。付属のハードフェルト芯が自分好みで、思い通りのラインを描けるという「再現性の高さ」も、とても気に入っています」

効率的に作業できるので、試行錯誤の時間を確保しやすい

「描きやすさ」を手に入れたことで、作業の効率性と、ストレスの軽減をもたらしてくれた、と坂崎氏は話す。「例えば修正作業の際、作業自体は単純でもツールの制約で思い通りにデータを処理できず、ストレスを感じるものが少なくありませんでした。Intuos4を使うと、思い通りのタッチで線を描けるので、修正作業だけでなく作品に

文字を加えたり、パーツを描き加えることにも積極的にIntuos4を使えます。紙の段階から描き直してスキヤニングするという手間がなくなりました」

なにより効率化とストレスの軽減は、自身の作品に試行錯誤していく時間を増やしてくれたとも坂崎氏は話す。

「『うわのそら』はちょうどIntuos4に切り替える際に作っていました。これまでなら二時間はかかっていただろうという作業が、一時間もあれば処理できるようになったので、Intuos4の精度の高さを体感しながら作品作りに没頭できました」

作品の描き始めから、Intuos4に任せられる喜び

Intuos4の再現性の高さは、特に鉛筆で下書きやラフを描いている方にお勧めだと坂崎氏は話す。

「Intuos4は、やらざらしたような微妙なテイストも、実際に紙に描いたざらつきのように再現します。最終的な納品形態がデータの場合、データ上で作業できれば時間と手間を省けます。制作上のメリットは大きいのです」

制作者にとって、道具の良し悪しは作品の質を左右する重要な要素だ。手描きのラインを再現しやすいという描き心地だけでなく、Intuos4の道具としての秀逸さは計り知れない。

「最初から最後までIntuos4だけを使ってイラストを描いたとしても、作品のクオリティに支障が出ないほど、ニュアンスレベルの描き込みができません。性能に信頼を置けるIntuos4は、私にとって、今後も使いこなしたい道具なのです」